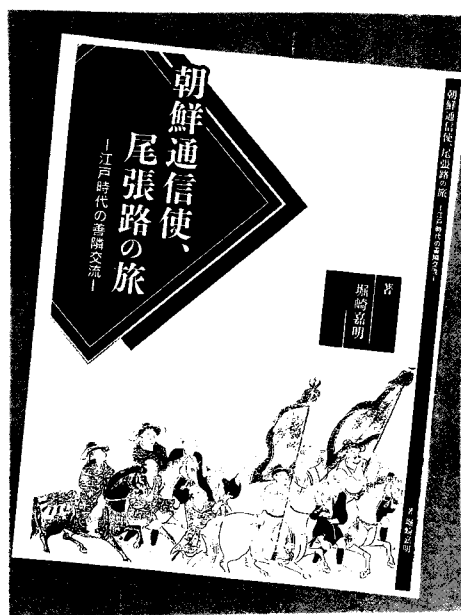


* 今月の花
オクラ

堀崎嘉明・著 『朝鮮通信使、尾張路の旅 ～江戸時代の善隣交流』



鎖国とされる時代を問い返し、日朝・日韓関係史の宝物掘り起こす
「隣国人との交流、直で多彩だった」
 使行録・市町村史料を読み込み、現地探訪をかさねた力作

『あとがき』から

【前略】小著では本来ならば鳴海宿以西の名古屋城下と美濃路での朝鮮使節の足跡を実証的に詳しく分析しなければならぬ。しかし、今後そうした仕事を進めるには余りにも時間が必要で、そのため取りあえずこの分野の先行研究に依拠して大略を叙述する方法をとった。

幸い朝鮮通信使が記録した「全使行録」が日朝協会愛知県連合会

によって刊行されている。小著の前半ではこれら使行録を読み進め、その記述内容を先行研究や市町村史が掘り起こした史実と付き合わせて起宿から名古屋城下までの足取りをたどり、後半の、鳴海宿や東阿野村で発見できた交流と合わせることで「尾張路の旅、善隣交流の足跡」の素描を試みた。

そこには「鎖国とされていた時代」にあつて、尾張の人びとが隣国の人びとと直接的で多彩な交わりを積み重ねた姿があつた。

小著で果たしてそれを上手く再現できたかどうか甚だ心許ないが、今後の研究の礎の一つとなれば幸甚である。【後略】

よみがえる 使節の遺産

【目次】

はじめに

船橋を渡る「渡河の情景／船橋の規模／工事の期間と費用／大雨での渡橋／コラム【若松實さんが翻訳した使行録】
 美濃路を行く「起宿から稲葉宿へ

／コラム【富田一里塚】／茶屋でのもてなし／通行への備え／コラム【禅源寺の扁額】／清須の情景／コラム【蘇った清須城下の姿】／名古屋城下へ

名古屋城下で「待ち受ける人びと／コラム【文左衛門、書画を得る】／通行を支えた人びと／知らされた使節情報／コラム【祭りに取り入れられた通信使】／尾張藩・名

古屋の印象／饗応の宴／コラム【鹿肉が供された尾張の宴】／盛んに行われた詩文応酬／コラム【名古屋に残る使節の遺産】
 鳴海宿では「鳴海路の情景／鳴海宿の印象／コラム【前浜の塩づく

り】／コラム【使節を迎える宿の人びと】／下郷家での交流／鳴海宿唱和
 東阿野村で「有松と阿野茶屋で／

阿野坂を行く朝鮮通信使／コラム【桶狭間村に残る「朝鮮使節行列図」／コラム【東阿野村の名医三田家】／延享度使節団への施療／コラム【発見された宝暦度使節の書画】／金有声の絵画／朴徳源の書／三田家に残る謎の遺墨

補章 雨森芳洲に学ぶもの
 【参考文献】
 あとがき

紹介と解説

尾張藩士の目に映じた朝鮮通信使行列

『琉球・朝鮮来聘記』(正徳元年)から

上村 順 造

挟箱 (はさみばこ)
【補注を参照】

はじめに

故若松賞氏が古書店で購入された冊子『琉球・朝鮮来聘記』(全二二〇頁)は、正徳元年(一七一二)に来日した第八次朝鮮通信使の記録である。

筆者は不明であるが、その内容から通信使接待にかかわった尾張藩士であることは、ほぼ間違いない。

記事の大半は江戸での幕府の接待の様子を記したものであるが、なかに、この年十月五日に名古屋に到着し、翌六日の朝、出立した通信使のことを記した箇所がある。

この部分は「朝鮮人名古屋泊りの節、御馳走仰せ付けられ候御役人の覚」(三八頁〜六四頁)と「名古屋発足、行列之次第荒増」(あらし)「(六四頁〜七六頁)」からなる。

前者は尾張藩の接待体制を記したもので「鳴海宿の箇所は本誌(二〇一四年六月(二七四号))で紹介」、後者は、筆者が目の当たりにした六日朝、名古屋を出発した通信使行列の有様を記したものである。

今回、通信使行列にかかわる部分を全文読み下し文で紹介したいと思う。

先頭を行くのは、①尾張藩士足輕頭中川勝蔵の行列である。続いて ②同じく尾張藩士御目付鈴木定左衛門の行列、続いて対馬より通信使に随伴してきた③対馬藩家老平田隼人の行列、このあと④朝鮮人の行列が続く。行列のなかで筆者は楽隊に興味関心を示しその描写は詳しい。朝鮮人一行のあと、再び⑤尾張藩士御目付永井太郎左衛門の一行が②と同じ供廻りを引き連れて続く。このあと五〜六〇〇メートルの間において⑥対馬藩主宗義方)の大行列が続く。このあと、行列は混乱し、千メートル余続くが、詳しく識別できなかったと記す。

さらに、①の中川勝蔵の行列に先立ち、岡崎での朝鮮人荷物差配役を命じられた⑦足輕頭星野三四郎の行列が出発していたことも記している。

「通信使之次第荒増」は、一部は午前一時ころから出発を開始して、通信使行列全部が名古屋を通り切ったのは午前十一時頃であったとして記事を結んでいる。

記念・協賛! この秋、

原文 (写し。二十%に縮小)

の原文
頁文

読み下し文

行列名

補注

【前略】

朝鮮人並宗對馬守殿、十月
六日朝五つ時過、名古屋発足
行列之次第荒増(あらまし)左之通。
先乗 御足輕頭 中川勝藏

釣具足 一釣
尻簾(しこ) 三立
對挟箱(はさみばこ)
對(つい)道具 はくま
大鳥毛(おおとりげ)

立笠
大笠
步行十二人 刀筒 式つ
勝藏 馬六人

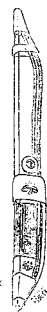
道具 式本
挟箱 對
牽馬(ひきうま) 一疋
駕籠 釣行也
合羽(かつば) 簾 八荷程
押(おさえ)之者 式人
茶弁当(ちやべんとう) 色々

右之外
相見ル
御目付 鈴木定左衛門
具足 一荷
尻簾 六人
步行 一人
定左衛門 馬六人
道具 式本
立笠 四人
對挟箱
駕籠 五荷程
合羽 平田隼人
對馬殿 家老 二つ
牽馬 五疋
尻簾 三立

①尾張藩士足輕頭
中川勝藏の行列

②尾張藩士御目付
鈴木定左衛門の行列

「尻簾」しこ 矢を入れて携帯する道具



「挟箱」はさみばこ 武家の公用の外出に際して必要な調度装身具を納めて従者にかつがせた箱



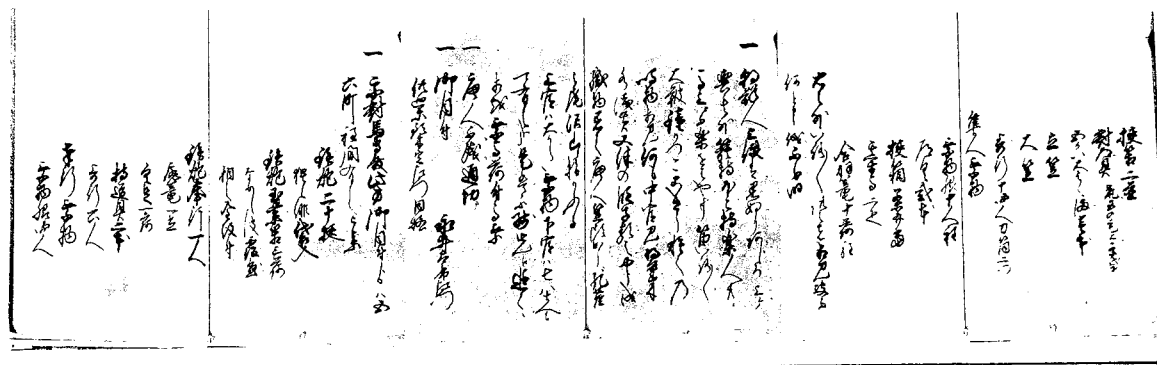
「対道具 はくま」ついでうぐはぐま 「対道具」道具は槍のこと、二本のそろいの槍 「はくま」は、「はくま(白熊)」のこと。「はくま」は、ヤクの尾の毛、払子(ほつす)に作り、旗・槍・兜などの裝飾用。



「大鳥毛」おおとりげ 鷹、鶏、鳥などの羽を集めて栗のいが状に大きく作った裝飾の一種。馬印や槍のさやとした。



朝鮮通信使史料がユネスコ記録遺産に



66

68

67

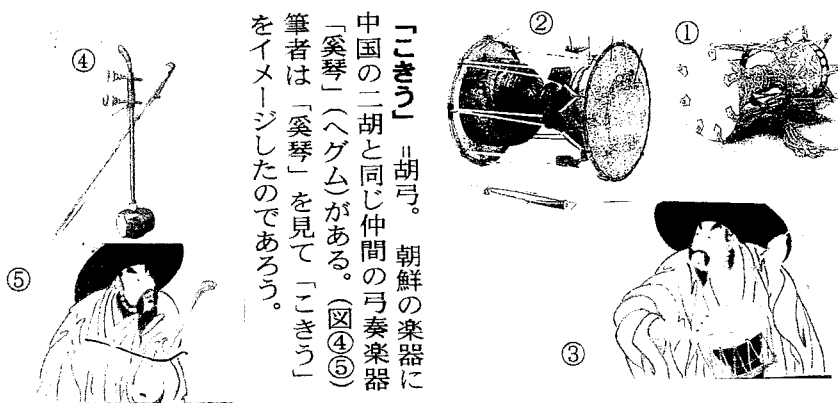
挟箱 二並
 対道具 鼠色の毛 大茶袋
 立笠 五かい 大はくま 沓本
 大笠
 歩行十四人 刀筒 二つ
 乗物 乗物
 乗物脇十人程
 道具 式本
 挟箱 茶弁当
 牽馬 二疋
 合羽簾 十荷程
 右の外いろいろ、供之者相見岐而(みわけて)
 何(いずれ)と申す儀、分明ならず。
 朝鮮人三使は、黒ぬりあじろ上ケ
 輿、其外、旗持・ほこ持・楽人共二
 馬上ニテ樂をはやす。笛いろいろ
 大鼓・鐘・かつこ・こきう 種々の
 鳴物相見、何(いずれ)も中官、装束を見るに、
 水浅黄(あきぎ)又練(ねり)の堅子(だんす)類のやう成(なる)
 織物を着す。唐人笠頭から孔雀
 之尾沢山二指(さし)かぶる。
 上官八八かた乗物、下官八八十人も
 有るべき候哉(や)、是は残らす先へ追々に
 相越、乗馬、荷付馬に乗る。
 唐人残らず通切テ
 御目付 永井太郎左衛門
 供廻(ともまわり)等、鈴木定左衛門と同格
 宗対馬守殿、此方御目付より八五
 六町程有り、参ぜらる。
 鉄砲 二十挺
 狸々緋(しやうじようひ) 袋入
 鉄砲玉薬箱 三荷
 なめし皮履懸(おおいかけ)
 桐之金紋付
 鉄砲奉行 一人
 尻簾 一立
 具足 一荷
 持道具 二本
 歩行 六人
 奉行乗物 四人
 奉乗物脇 四人

⑥対馬藩主 宗義方の大行列

⑤居張藩士御目付永井 太郎左衛門の行列

④朝鮮人の行列

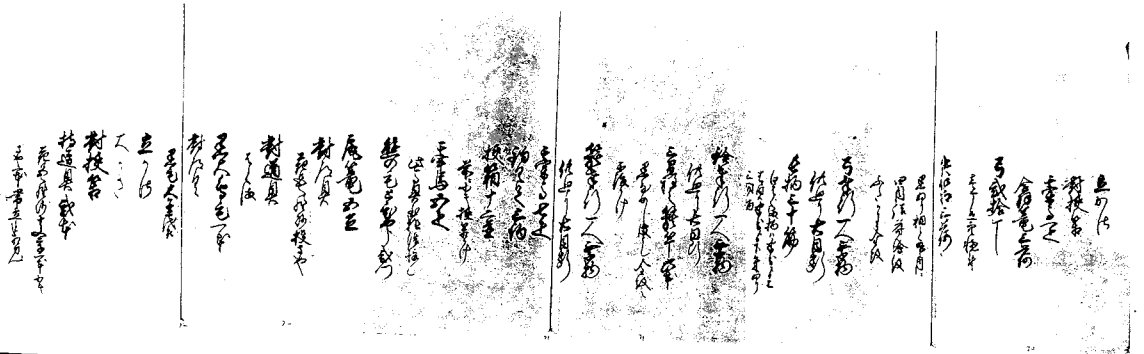
③対馬藩家老 平田隼人の行列



「こきう」 胡弓。朝鮮の楽器に
 中国の二胡と同じ仲間の弓奏楽器
 「奚琴」(ヘグム)がある。(図④⑤)
 筆者は「奚琴」を見て「こきう」
 をイメージしたのであろう。

「かつこ」 羯鼓 雅楽で使用する
 打楽器で砂時計型をし、左手で調
 べ緒をもち、右手に持った木製バ
 チで打つ。革は馬皮(図①)これ
 に似た朝鮮の楽器に「杖鼓」(チヤ
 ング)がある。(図②③) 杖(木の
 棒)で叩く砂時計型両面太鼓。筆者
 は、「杖鼓」を見て「かつこ」をイ
 メージしたのであろう。

記念・協賛！ この秋、



72

71

70

立かき 対挾箱
牽馬 一疋
合羽籠 三荷
弓 式拾丁
矢筈（はこ） 三荷
黒ぬり桐と丸之内二
四目結（しめゆい） 蒔絵紋
ふたがわ金紋
弓 奉行一人 乗物
供廻り、右同断
長柄 三十筋
白はくま、柄八半分より上
青貝、半分より下朱ぬり
三間柄
鎗奉行一人 乗物
供廻り、右同断
三間程之旗竿 六本
黒なめし皮ニテ金紋之
覆（おおい）かけ
旗奉行一人 乗物
供廻り、右同断
牽馬 七疋
釣具 三釣
挟箱 十二並
前 小キ挾箱かけ
牽馬 五疋
此馬具、至極（しごく） 結構也
熊の毛と、ひょう 式つ
尻籠 五立
対道具
花色羅紗投（らしやなげ） さや
対道具
はくま
黒大鳥毛一本
対道具
黒毛大茶袋
立かき
大かさ
対挾箱
持道具 式本
花色羅紗十文字一本、小
さや一本、常立と相見る

← ⑥対馬藩主 宗義方の大行列 ←

「立笠」 二たてがき 長柄の大笠。
ビロードやラシャなどで作った袋
に入れ行列の際に供の者に持たせ
た。



「牽馬」 二ひきうま（引き馬）外出の
行列に鞍覆（くらおおい）をかけて
美々しく飾り、連れていく馬。



「合羽籠」 二かつばかご 行列の
ときなどに、供の人の雨具をいれ、
担わせた籠。ふたのある二つの籠
で前後を棒で担いだ。



「押之者」 二おさえのもの 行列の
最後につき警護する役。
「茶井当」 二ちやべんとう 外出の
際、茶道具一式を携帯するための用
具。



[illegible][illegible]

73

74

75

長刀 一振
花いろ羅紗
歩行 貳拾六人
刀筒 四つ
對馬守殿 乗物
乗物脇八三十人程
道具四本
さや、いろいろ、内巻本三間柄
黒塗さや、二かい はくま
右四本八常立と相見る
挾箱
茶弁当
牽馬三疋
乗懸馬（のりかけうま）一疋
杓（く） 籠
合羽籠
押之者
従者
乗物にて道具二本又は一本
馬上にて旅行之家中、医者、乗
かけにて参し候者、十町余も続く、
混乱にて跡（あと）は、とくと見えず。
御先手足輕頭星野三四郎
唐人の荷物裁許之役仰せ付けられ
六日朝六つ半比（ころ）岡崎へ
相越る。

朝鮮人、十月五日夜九時半時比より

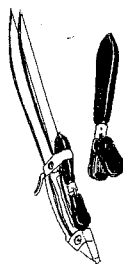
← ⑥対馬藩主
宗義方の大行列 ←

⑦足輕頭 星野
三四郎の行列 ←

「三使」さんし 通信使の正使、副使、従事官のこと。正使は使節団の総責任者。副使は正使を補佐し、事務を助ける。従事官は毎日、そのことを記録し、帰国して国王に報告。

「猩猩緋」しようにうひ黒みを
帯びた鮮やかな深紅色。またその
色の舶来の毛織物。

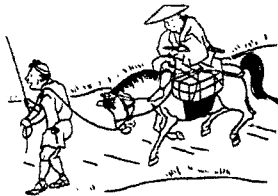
「空穂」 二つつば 矢を入れる容器。
矢が雨に濡れないように矢全体を
納める細長い筒。



「四目結紋」 二よつめゆいもん 対馬藩主宗家の家紋（左）



「乗懸馬」のりかけうま 荷駄と人間を一緒に乗せて運ぶ馬。



記念・協賛！ この秋、

おわりに

最後に、この行列を見た二人の尾張藩士の記述を紹介しよう。
 一人は、尾張を代表する考証学者天野信景である。彼はその著『塩尻』のなかで、行列の威容に神功皇后のいにしえに思いは四十ばかり、かたちうるわしく、冠服ゆへゆへし。副使。従事大方五十にも及びなん、いづれもいづれも容儀しづかに、君子の風あり。」と賞賛している。

いま一人は朝日文左衛門である。彼はその著『鸚鵡籠中記』のなかで、行列を「酒売場」を見物席に仕立てて友人と一緒に見物したと記している。「対馬守家来夥し」と対馬藩の行列の人数の多さに驚き、同僚の行列について、「星野三四郎、中川勝蔵、荷物を押え、鈴木定左衛門 韓人の先を乗る。長井(永井)太郎左衛門後を押す。いづれも拵え馬装束等見事なり。」とたたえている。残念ながら、朝鮮人の行列については何もふれて

先立之者、荷物、下官、追々通る
 翌六日、屋四つ半時比までに名古屋
 之地通切る也。

76

【後略】

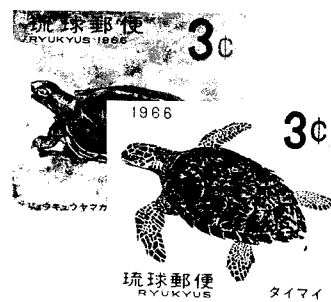
いない。文左衛門は、行列見物のため、藩主(四代吉通)が正室を伴い城下の商家の屋敷に出向き、藩主の意向をうけて「梅昌院様」(三代綱誠の側室)、「二の丸様」、「御家老・御用人」等がそれぞれ商家の屋敷で見物に参じたとも記している。行列が始まったのは辰時(午前七時~九時)、通り過ぎたのは巳刻(午前九時~十一時)過ぎと記す。これは「行列之次第荒増」が記す時刻とほぼ一致する。

なお、文左衛門は、通信使一行が名古屋に到着する前々日の十月三日に、娘おこんが韓人見物のため嫁ぎ先から帰ってきたと記しているが、このことに関しては、千田龍彦『尾張なごや傑物伝』宗春がいた 朝日文左衛門がいた(風媒社)を参照されたい。

「行列之次第荒増」全文解説にあたり、名古屋市博物館の山本祐子、種田祐司両氏に御教示を得た。貴重な時間を割いてくださった両氏に謝意を表する次第である。

「音籠」リくつかご 武家の履物を入れる籠。





琉国物語 ⑦

金城博己

（琉球人）

（一九七二年五月十五日 沖縄返還記念式典会場Ⅱつづき）

その頃砂川は、琉球警察の機動隊一〇〇人程と共に、民政府の建物を取り囲むように警護していた。また警護の必要があると、その倍以上の警護要請を警察幹部に出しているところだ。英雄は、民政府の職員と共に大里主席に付き添っている。まだまだ、落ち着く気配も無く騒然としたままの会場、演壇に立つたままの大里主席が英雄の方を向き、小さく手招いている。英雄はほんの五、六歩程の距離で大里主席の後ろに控えているので、すぐに大里主席の傍によると、体が触れ合わんばかりに身を寄せた。大里主席は、実際は大声だったはずだが、その声はやつと聞き取れる状態であった。

「大宜見君。君はこれから、砂川君の応援に行ってくださいませんか。砂川君は今、庁舎で大事な仕事をしています。きつと、君の助けが必要だと思えます。私はこれから、後藤総理と大切なお話をしなければなりません。今、会場の方は比較的に安全は保たれていると思えます。あなたは一刻も早く砂川君の応援をお願いします。庁舎で彼の指示に従ってください。」

秀雄は急いで庁舎に戻った。そこで英雄が日にしたのは、百人以上はいると思われる機動隊が庁舎を取り囲むようにしている光景であった。その中に同じ秘書課の職員の顔が見えたので、砂川の所在を尋ねたところ、地下の資料室に居るのではないかと聞く。

急いで庁舎の階段を下りながら、（たしか資料室は閉鎖され、駐車場の南端の大きめのプレハブに、資料を整理のために運び

込んだはず。で、資料室は空っぽなはずだが。）と思いながら地下に着くと、元の資料室の前で砂川は、四、五人の機動隊員と何やら話をしている。警備の内容を指示している様である。

話が終わり、機動隊員らが地上にあがると、砂川は英雄の顔を見て、ニツコリした様に見えた。

「大宜見君、よく来てくれました。ちょうど君の助けが必要のところでした。ちよつと中に入ってみましょう。」

砂川の後について中に入ると、空のはずの資料室に部屋中ぎつしりとダンボールが詰まっている。広めの部屋だったはずだが、ダンボールでいっぱいである。

「砂川さん、このダンボールは何なのですか。」

英雄は思わず、砂川に尋ねた。

「このダンボールの一箱には、日本円の高額紙幣で四億円が入っています。それが全部で二五〇個、重量にして約十トン、全部でいくらになると思えますか。」

英雄は、逆に問われて、あわてて計算してみる。

「一千億円になるじゃないですか、一体どうなっているのですか。」

「大宜見君。この前、自衛隊の艦船でドルと円との交換用に六百億円が、仰々しく沖縄に搬入されて来たのは、君も覚えていると思います。あの六百億円のほとんどは小額紙幣と硬貨として、重量も嵩も大きなものでした。ここにある一千億円は全てが高額紙幣で、十トンコンテナに誰にも知られないように、極秘体制で、日琉の申し合わせ通り、半年も前に運び込まれて

いたのです。

ただひとつ、日琉の申し合わせと違ったのは、銀行の金庫ではなく、庁舎のこの元資料室に運び入れて素知らぬふりをしていたのです。ですから君が知らないのはもつともなところですよ。このダンボールには日本政府の広報用の資料が入っているとしたのですが、意外に誰も疑うこと無く、安全に保管されてきました。が、今となつては、日本政府が銀行の金庫の中を改めて、あるはずの一千億円がないと知るとどういう行動を取るかわかりません、それで機動隊の応援を頼み、警戒してもらっているのです。今頃は、大里主席が後藤総理と話し合っているはずですよ。その結果で、このお金の行き先が決まってくれるでしょう。」

大里主席は、会場内の小部屋に後藤総理を誘い、向き合っている。

「後藤総理、状況はご覧になられた通りです。」

と、静かに大里主席が話しかける。後藤総理は、やつと落ち着きを取り戻したのか、

「日本政府は、沖縄の自治独立を認める訳にはいきませんよ。」ハッキリした日調で、しかしながら、心なしか目をそらし加減に言葉を返す。

「それは、後藤総理として、日本政府として当然のお言葉とお受けいたします。ですが現実には、アメリカをはじめ諸外国から早くも承認の声明を受けていますれば、私も琉国政府としてもその様に作業を進めていくところでございます。はなはだ勝手ではございますが、琉国政府としては日本政府に友好関係を望みますし、日本政府と絶交するなどは避けるべき事だと考えております。」

「あなた方は、日米の沖縄返還協定をなんだと思っておられるのですか。国と国との約定を軽率に破つて、それで済むと考えているのですか。」と後藤総理が言葉を荒げる。

「ハテ？ 日米の返還協定と言われますが、その協定自体、私も琉国に影響を及ぼすとお考えですか。協定が結ばれた時点、

イヤ、その以前から、日米の間において協議された結果、協定が結ばれたのは知っておりますが、その協議の際、当事者であります琉球政府は、一点の協議の余地も与えられず、協議書に署名される事もなく、そしてその場にさえ、私は出席した覚えもありません。当時の琉球政府、いや沖縄は、ある意味どちらの国にも属さない流浪の民島の様でありますれば、その、日米間の協定を私どもが承認しなければいけない事も無く、琉国政府に何らも影響を及ぼさないと考えるものであり、その事ゆえに諸外国からの承認を受けたものだと考えます。琉国政府として、私個人としても日本政府の承認が得られない事は残念ではございますが、日本政府の対応を当然の事として受け取らなければならぬと考えます。しかし、後藤総理が沖縄の返還につきまして、政治生命を賭して全力を傾けられてまいりました事は、結果の如何を問わず、感謝こそすれ、恨みつらみなどの思いは微塵もありません。もとより、私どもの胸の内にも、沖縄の風土にも、恨みなどという言葉は、文字のうえにも、心の内にもあり得ないものであります。その事実は、これまでの歴史が証明してくれているのだと考えます。今、私どもが言える事は、あなたは、真実、沖縄の事を思ってください、日本国総理としての立場とは別に、あなたの心根に沖縄への格別の想いがある。それは間違いないのだと信じて、今、ここに、琉国の未来のために、ご理解をお願い致すところでございます。」

ずつと聞いていた後藤総理は、しつかり目を開き、大里主席を正面から見据えている。

電話が鳴った、一回……、英雄も砂川も体が動かない、二回、……、三回、……、砂川の手がのびて電話を取った。

「はい、……はい……はい。分かりました、すぐにその様にさせていただきます。」

受話器を置いた砂川は、

「大宜見君、このお金は、沖縄のために使える様になりました。堂々と、琉国のスタートのために使ってもいいんです。」

「日本政府は、琉国を承認したのですか。」

「イヤ、それは無理でしょう。日本政府としては、沖縄は、あ

くまでも日本国においての沖縄県だという見解を崩すことはな
いと思います。」

「では、何故このお金が自由に使えるという事になったのです
か。」

「その件は、正式な形式ではないと思うのですが、分かりやす
くいえば、開発途上国に対する円借款とでも言えばよいのでし
ょうか。しかし、琉球を承認しない上での、円借款というのも
おかしい話ではありますが。とにかく、後藤総理の一存で琉球
側の申し出には応ずるという返事が頂けたそうです。しばらく
後には、正式な発表があるでしょう。」

「とにかく、このお金をもとに琉球沖縄のスタートを切
るのだ。総額一、六〇〇億円。」

「大宜見君、このダンボール二五〇個を二つの銀行の金庫に運
び込むの手伝って下さい。二台のトラックが、地上に準備さ
れているはずですよ。」

その後、三〇分程で四億円の入ったダンボールが一二五個ず
つ二台の大型トラックに積み込まれ、それぞれの銀行の本店金
庫に一時帰国後は、無事に運び込まれた。ホッとしていた英雄
は後ろに人の気配を感じて振り返った。そこに立っていたのは、
那覇総合事務局の鈴木である。鈴木は、

「今回、日本政府は一つの大きな間違いをしました。長い事、
薩摩の支配に苦しめられた歴史を持つ琉球を、会津出身の私に
琉球政府の監視役を命じたのですから。私は逐一あなたの方の行
動を監視、つまり、さぐっていたのですが、どうも政府への報
告があやふやになってしまったようです。それに、あのダンボ
ールの中身が何なのか知りませんし、知りたくありません。
今、私に分かっているのは、私の出世はないだろうということ
です。」

言い終えた鈴木はくるっと背を向けて大通りを渡ってい
た。

(つづく)

第49回韓日歴史・文化フォーラム

高麗時代の大蔵経と仏事

—蔵経道場を中心として—



2017年

8月30日(水)

午後6時～

場 所／愛知韓国人会館 5階ホール
名古屋市中村区亀島1-6-2
地下鉄東山線「亀島駅」③出口より徒歩1分
参加費／500円 ※資料代として
主 催／韓日歴史・文化フォーラム実行委員会
後 援／駐名古屋大韓民国総領事館
在外同胞財団
講 師／安田 純也氏(滋賀県立大学 非常勤講師)

蔵経道場とは、高麗時代到大蔵経の転訕を中心として開催された仏事です。大蔵経(蔵経)とは、釈迦の説いた教えをまとめた経蔵、教団の規則をまとめた律蔵、教理の研究をまとめた論蔵の三つ(三蔵)からなる、仏教經典の総体のことです。高麗時代の大蔵経と言えは、11世紀に刻板された初雕本と、モンゴルの攻撃で初雕本が焼失し再び13世紀中葉に刻板され、現在も韓国の海印寺に板木が所蔵されている再雕本の二つが、高麗版大蔵経として知られています。

蔵経道場は、『高麗史』によると、第8代国王顯宗の時代の1029年に王宮最大の宮殿である会慶殿で、1万人余りの僧侶への食事供養をとらなって開催されたのが最初の記録として残っているものの、それ以前から開催されていたと推測されます。その後、第10代靖宗の時代の1041年に春秋2回開催される恒例行事として整備され、朝鮮時代の初期に廃止されるまで続けました。今回のフォーラムでは、韓国中世史(高麗時代史)を専門とする安田純也氏を招き、蔵経道場を中心に大蔵経と仏事とのかかわりについて話してもらいます。

【お申込・問合せ先】FAX:052-452-1716 E-mail:jigyo@mindan-aichi.org

韓日歴史・文化フォーラム事務局(民団愛知内) 金栄一(キム・ヨンイル) TEL:052-452-6431

鑑賞のおすすめ



[その23]

韓国映画（2014年）

「国際市場で逢いましょう

（국제시장）」

伊藤 一郎

（朝鮮文化を知る会）



同映画ポスター

『どのようなことがあろうとも…』
戦火・分断・軍政下の離散家族
つながる情の深さに感動

朝鮮戦争、軍事政権、そしてベトナム戦争など、韓国の激動の時代を家族のためにささげた主人公のドクスの生涯を描いた映画である。ドクスを韓国の名優ファン・ジョンミンが演じる。映画の全体を通してドクスの「家族のために」というテーマが一貫している。

映画は釜山地下鉄二号線のチャガルチ駅からほど近い現在の国際市場の喧騒から始まる。衣料や生活雑貨を売る店の中に食品を売る屋台が入り交じり、混沌とした状況を呈している。カメラは人々の間を自由に飛び回るモンシロチョウに先導されて迷路のような市場の様子を追う。

そしていきなり場面は一転して、一九五〇年の咸鏡南道興南（現在の朝鮮民主主義人民共和国の東部）の灰色の風景に切り替わる。

人々の方言も咸鏡道方言に切り替わり、路上では毛布にくるまる路上生活者が、雪が降りしきる氷点下の厳しい冬の寒さに震えている。朝鮮戦争における興南脱出作戦のさなか、主人公のドクスの頭上を飛行機が編隊を組んで通り過ぎ少し離れた場所に爆弾を落とす。中国軍が興南に到着し、いままさに国際連合軍が一斉に撤退して

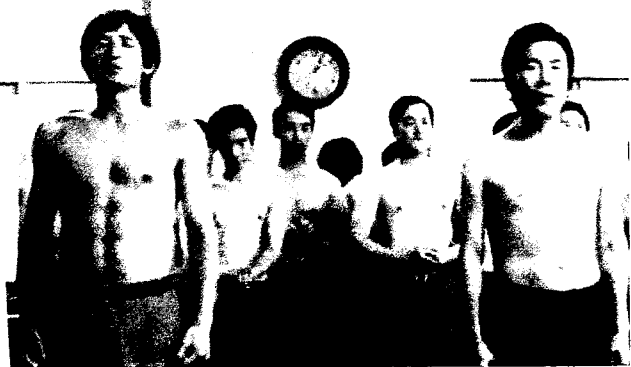
いるさなか、軍艦・メロデイス・ビクトリー号上では韓国人が撤退を命じた將軍に必死に訴えかける。「わが国民を助けて下さい。われわれがこのままこの場を去れば、戦火に埋もれた人々は中国軍の攻撃で皆殺しにされてしまいます。」

すぐに出港しようとする軍艦の周りには、多くの避難民があふれている。必死に逃れようと人々が押し寄せる軍艦の乗船口では、国際連合軍の軍人が避難民を蹴散らし、拳銃で威嚇射撃を行う。そして乗船口は無情にも閉じられてしまう。乗船口が閉じられ、避難民が完全に見捨てられたかと思われたそのとき、將軍はおもむろに口を開く。

「この船に何名まで乗せることができるのか？」耳を疑う船員たちのなかで將軍は、船に積載した武器をすべて捨て、避難民を乗せることを命令する。開く乗船口を見て避難民は互いに抱き合つて喜ぶ。船からは、先ほど積み終えたばかりの戦車や軍用車が船から続々と運び出される。

戦車や軍用車と引き換えに避難民が船内になだれ込む。われ先にと避難民が船に殺到するなか、ドクスと父は、船に乗り込む途中で妹のマクスンを船の下に落として

西ドイツの炭鉱への採用試験に
のぞむドクス



しまう。父は凍てつく寒さのなかで自分の上着を脱ぎ、ドクスに着せる。

「どのようなことがあろうとも、家族が優先だ。分かったか。」

そして妹のマクスンを救うため、最後の言葉を残して船を下りる。船に乗れなくて力尽きた人々の水死体が浮かぶなかで父は妹を探し回るが間に合わない。無情にも船は、父と妹を残して出港してしまふ。

出港後、街は炎に包まれる。炎と煙だけになった街を前に、船上の避難民は号泣する。メロデイス

・ピクトリー号は一万四千名の避難民を乗せて出港した。

場面は一転して、一九五一年の釜山・国際市場。ドクスの父は興南でドクスと別れる際、釜山の国際市場の叔母の店「コップニ」(日本という「花子」)での再会を誓った。ドクスは母と二人の弟妹の家族五人で叔母の店「コップニ」を探す。

叔母と会った家族四人は、「コップニ」の納屋で新しい生活を始めた。ドクスが学校で同級生に北の興南から来たことを明かすと「お前はパルゲイン(アカリ共産主義者)か」とのしられる。

混沌とした弱肉強食の市場のなかで、ドクスは靴磨きで家計を助け、時にはアメリカ兵にチヨコレイトをもらったりする。街角のラジオからは、アメリカ帰りの李承晩が朝鮮戦争の停戦を伝えている。

一九七三年の七月のことであった。ラジオを聴きながらドクスは、国が二つに分断され、父のいる興南に帰ることができないことを悟る。ドクスは部屋に飾られた父の写真を見ながら酒を飲む。父はドクスに語りかける。

「どのようなことがあろうとも、家族が優先だ。分かったか。」

息子は父の言葉を繰り返し胸に

刻む。ドクスは家族のため、ソウル大学に合格した弟の学費を稼ぐため、西ドイツ(当時)の炭鉱に出稼ぎに行く。異国での炭鉱の重労働でドクスの目に希望はない。与えられた石炭の採掘の重労働に耐える。最悪の労働条件の下で、作業中の負傷者が続出する。炭鉱の現場や劣悪な二段ベッドの寮では、常にドクスの同僚の泣き声が聞こえる。

当時、応募書類をきちんと作成できる人材のみが応募したため、炭鉱労働とは無関係の高学歴の青年が多く炭鉱に従事していた。それによつて不慣れな仕事に伴う事故が多発したという。厳しい生活のなかでもドクスは、生活のために韓国から西ドイツに出稼ぎにきていて、のちにドクスの妻となる看護師(キム・ユンジン)と出会う。

ある日、炭坑内で事故が発生する。炭鉱のあちこちで炭道が崩壊し、作業員が次々と負傷し、ドクスも炭道に取り残されてしまう。ドイツ人の炭鉱の管理者は、炭坑への入坑を禁止してドクスたちを見捨てようとするが、同僚たちはドクスたちを救うために制止を振り切って再び炭鉱に入る。炭鉱に取り残されたドクスの同僚は、瀕死のドクスの口から石炭を掻き出

し、心臓マッサージをする。そしてドクスは奇跡的に息を引き返す。

「泣くな、ドクスよ。ありがとう。お前は家族をきちんと守った。」お父さんにずっと会いたかったです。」号泣するドクスの手には、父と興南で生き別れた際に厳しい寒さのなかで、父が脱いで渡してくれた上着が握られていた。

映画が放映された当時、多くの韓国人男性がドクスに自らの姿を重ね合わせたという。ドクスは両親との再会がなかったが、いまだに北と南で生き別れた離散家族が存在する。

限りある字数のなかで、映画のすべてをこの文章で語り尽くせないことが歯がゆい。

映画でドクスは、分断された南北朝鮮の激動の歴史を生きた。二つの世界を生きて、慶尚道方言と咸鏡道方言の二つの方言を話している。変化の多い社会を描いた映画だけに、映画の登場人物は、時にめまいのするような激しい方言での応酬をしている。荒っぽいながら人間と人間の深い情のつながりが感じられる。

映画をまず一通りみて、しばらく帰っていなかった故郷に帰ったような不思議な感覚に襲われた。生きるとは何かを考えさせられる映画であった。

朝鮮、中国を叱る

朝中関係の柱を切り倒す無謀な
言動をくりかえすことなかれ（下）

都 宗 樹

「日本の報道ではあまり注目されなかった朝鮮民主主義人民共和国のある論評について、都宗樹さんから投稿がありました。二回に分けて紹介。今回の（下）は〈解説編〉です（編集部）」

1 盟友の立場

論評は、中国を評して：①米国の力に押され：②目前の利益に目がくらみ：③兄弟の友情まで捨てるならば、④朝中関係の柱を切り倒し：⑤誰の信頼も得られない、と論難している。朝中関係の本質を反帝自主を戦う盟友であるとする立場に立つものだ。

朝中は抗日戦、中国内戦、抗美援朝戦争を共に戦い、社会主義革命の道を切り開いてきた。反帝、反霸権、反大国の新しい世界の創造者たらんとした。第三世界の主権、自主権の確立、米国の支配する「国際秩序」からの解放である。

ところが、朝米の核対決がクライマックスに達するや、中国は米国の『国際社会』の「見解」に同調する。

中国は、…中国の国家的利益に脅威となる。…関係悪化の責任は

朝鮮側にある。…東北アジアの情勢を緊張させ米国の戦略的配置を強化させる口実を提供している。

：朝中関係の主導権は自らの手にあり、…授けがなければ生きていけないであろう、等、大国主義、覇権主義的であり、帝国主義の笛に踊るありさまである。朝鮮にとっては、あるまじき背信である。

朝鮮は単独でも、自国の生存と主権、時代の要請である自主権を守るために米国の戦う意思と力を備えているが、中国と米国の協調は背信と断じている。

2 核は許しがたい大量破壊兵器である

広島と長崎を世界は知る。大虐殺の都市を知る。核保有五大国はその核によって、「世界秩序」の覇者となった。

ここ七十年間、戦火が世界各地に広がっている。核を手にした国

の横暴である。許しがたい。朝鮮もその標的の一つにされた。朝鮮人たちは半世紀にわたり、米国の核の脅威に悩まされ続けた。世界の知らない未曾有の体験を持つ。国家の主権、自主権は七十年間核恫喝に脅かされ続けた。主権と自主権は絶対的な尊厳であり、最高の利益である。

主権と自主権は当然ながら自身の力によってしか守られない。

朝鮮民主主義人民共和国は大国の核による覇権をねついに核で以て制することを決意した。反帝反侵略に抗した、全人民的抗争論は大量破壊には大量破壊で応える奇手はなつた。

五大国の核独占体制の横暴と大国主義にあぐらをかく世界戦略の常識は大きくゆらいだ。①反核の市民運動、②反核の国連決議の動きがある。③ここに（小国の核による）覇権国の核独占と不当な小国への恫喝戦略への一矢がはなれた。

朝鮮の核をどう評価するのか。米国の「国際秩序」に、NPT体制に反する邪悪な戦争狂の米国から、自主と主権、世界平和を守るものかと問われる。非核化への一石となる。朝鮮と中国は盟友である。

反米、社会主義と自主の旗を守る闘いで志と力を合わせてきた。

しかしながらこれらのすべてを故意に封じ破廉恥にも米国の言う『国際社会の一致した見解なる』ものに連なる…のかと、朝鮮は中国を叱る。両国の対米政策のもたらした相異から生じたものであろう。

それは一九七二年の米国の国交正常化に始まると考えられる。米国は大国中国との関係を改善する一方で小国朝鮮への軍事的圧力を強めた。

一九七二年の「チームスピリット」侵攻演習の恒例化である。国連安保理事国となり、世界資本主義市場への参入、世界の「工場」へと、中国は米国との戦略的パートナーに成り上る。

一方朝鮮は経済封鎖、軍事進攻の標的、情報戦の標的となり、国家崩壊へと圧迫された。

朝鮮の統一問題に関しても、米国の分断固定化に追従するのみで、国連への南北同時加盟に従い、中国の韓国承認をもたすが、米国の朝鮮承認を果たすことはなかった。

その後の、一九九四の米国の対朝鮮軍事進設計画等の朝鮮国の国家存亡の危機に際してもさしたる動きはなかった。

核問題に際しては、ついに国連安保理の名による制裁に連なってしまう。

自国の平和的環境への保障を最優先する、六者協議においても、米韓による「魔女狩り」裁判に与するのみであった。米国の朝鮮国への不当な抑圧の是正に、国際世論を喚起することもできなかった。

ごく最近の中露トップ会談で、米軍の対朝鮮軍事演習の中断をようやく言及している始末である。

3、朝中関係をふりかえってみる

①民族解放(独立)戦争時期

(一九三二年〜一九四五年)
「日中十五年戦争」と呼ばれる時期、中朝ゲリラは共に抗日戦を戦った。

②国共内戦時期

(一九四五年〜一九四九年)
中国共産党の中国革命に朝鮮人部隊約二五万が参戦し、海南島解放まで共に戦った。朝鮮は中国共産党軍の後方地帯となり、中国革命成功に大きく寄与した。

③朝鮮戦争

(一九五〇年〜一九五三年)
朝鮮の南北分断により、朝米間戦争が勃発。中国は「中国を守り、朝鮮を支援するために、米国に抗する」と五十万の義勇軍を朝鮮におくる。

④国際共産主義運動内の分裂

「中ソ論争」に見られる社会主義内の対立が表面化した時期、朝鮮

労働党は反帝反米闘争の最中で、公開論争に反対を表明。特に党代表者会議を開催して、『自主性を擁護しよう』を発表する。帝国主義と大国主義を共に批判する。朝鮮の自主性、世界の自主性の時代を強く主張する。

⑤中国・米国の国交正常化時期

一九七二年のニクソン大統領の訪中によって、その後両国の国交正常化、中国の国連安保入りが決まる。国際秩序に大きな変化が起こる。キッシンジャーの外交戦略は、社会主義陣営内の論争に乗じて、その外交的分野にまで至らしめた。また米国の対社会主義政策に、大国とは対決をさせ、小国を各個撃破するせんりやくへの布石となるものであった。

朝鮮労働党はニクソン訪中を「米国が白旗をかがけて訪中した」(金日成主席)とその外交関係を評した。同時に新たな帝国主義と社会主義大国による覇権主義を予見する。

朝鮮労働党は一九七二年に「金日成主義」を表明した。「主体」の思想と理論・方法を体系化する。ソ連による伝統的なマルクス・レーニン主義、中国の「毛沢東思想」と並び立つことを意味した。

朝鮮と中国はその国際的外交環境の変化(米国との共存と敵対)と社会主義理念にずれを持つよう

になる。

⑥南北朝鮮の国連同時加盟

米ソデタント(緊張緩和)は朝鮮半島情勢に大きな影響を与えた。ソ連、中国の韓国承認である(一九九〇年と一九九二年)。しかしクロス承認を主張していた米国と日本は朝鮮承認を行うことをしなかった。朝鮮国にとって国際的孤立を招きかねない状況がつくられた。

ソ連のシュワルナゼ外相の事前の訪朝に対し朝鮮は強く抗議し、核武装を示唆する。何故ならば、朝ソ軍事同盟の無効につながる大事件であったからだ。

中国に対しても強い不満を抱く。朝鮮の南北統一路線への事実上の阻害要因となったからだ。

⑦ソ連崩壊と米国の「残党狩り」

クリントン政権のジョセフ・ナイ「リポート」は中国とはソフトランディング、朝鮮は崩壊させる戦略を示した。

朝鮮が社会主義市場を失い、大自然災害を受けて危機に陥るや、米国は一九九三年、九四年に軍事介入を決意する。朝鮮は対米「準戦時態勢」をとり、戦争前夜の危機直前に、朝米会談の席に着かせ

⑧六者協議

一九九四年「朝米合意枠組み」が成立して、朝米の新たな関係が

出発したかのように見えたが、ブッシュが合意枠組みを壊す。

※平岩俊司氏は、「独裁国家・北朝鮮の実像」で、「私はやっぱりアメリカが壊したと思いますよ。クリントン政権はアメリカの議会に対して、『北朝鮮という国は今後五年もたない』と説得した。ブッシュ政権になっても崩壊しない、『おかしいじゃないか』と『合意』以外の話を持ち出したからである」と語る。

六者協議の議長を中国が務めた。会議は朝鮮半島の核問題の解決を論議し、朝鮮と米・日・韓の関係を改善を目的にした。(朝米平和協定、朝日国交正常化、南北交流正常化)しかしながら、米・日の「魔女狩り」の場になり果ててしまった。(北の核だけでなく世の大合唱)要するに、『国際社会』の現在の中心勢力の枠組みの中に取り込んでも、朝鮮を管理しようとする、という戦略だ。(米・中共同管理、新型大国関係の下での管理)

金哲論文は、朝鮮が米国との最終決戦の段階に突入した時期に発表されたもので、たんとくでの対米戦を表明するものでもある。

いま面白い市民運動の情報誌 グループ紙誌 拝見

●瀬戸地下軍需工場跡を保存する会会報
(No.140号)二〇一七年七月一日
発行：同会／瀬戸市

○春の戦跡見学会 (二〇一七・五・十三) 瑞浪・金戸紅葉山の地下壕Ⅱ三菱発動機第四地下工場／日中不再戦の碑

○「大戦秘話」十三試艦上爆撃機「彗星」⑦愛知航空機製量産機の素性：愛知航空機研究家・渡辺哲国

○陶都戦争譜④：中部大学講師・中村儀朋

○「新証言」八月十五日、青年将校の自決／東方に山を望む浦山で：感応寺住職・梶田義暢氏に聞く
ほか

●草の根

(第三七九号)二〇一七年七月六日
発行：原水爆禁止愛知県協議会／

名古屋市区

○二〇一七あいち平和行進／核兵器を廃止し禁止する条約を！

○「草ノート」戦後七二年、沖縄の不発弾。なお二〇二二トン埋蔵、処理に七〇年

○「ヒバクシャ国際署名を進める愛知県民の会」設立総会／七月三十日午後一時／イーブル名古屋(三階ホール)

●あま東部

(No.九五)二〇一七・六・一八発行：あま東部平和委員会／海部郡大治町

○数の暴力！現代版治安維持法「共謀罪」強行成立／この国の民主主義は死んだのか！

○「市民アクション」あいち九区」設立：五月十四日

○野党共闘実現へさらに一歩：濱崎裕功

○「あいち平和行進」あま東部コース／あま市は今年も市幹部らが出迎え／今年も清須乙女座が美濃路を盛り上げる
ほか

●日中友好新聞・愛知県連版

〈第二五〇号〉二〇一七年七月一日
発行：日中友好協会愛知県連合会／名古屋千種区末盛通
○雲南省に少数民族を訪ねる旅①
：木俣博
○第五回愛知大府飛行場中国人強

制連行被害者を支援する会総会開催 (五月二八日) 報告
○「稲沢支部講演会」竹内テル子さん『満洲で、敗戦から引き揚げまでの一年二カ月の体験』
ほか

と き 8月10日(木)～13日(日)
10:00～18:00 (最終日は17:00終了)
入場料 一般 500円
小学生以下 無料 (中学生以上 500円)
ところ 市民ギャラリー矢田 (名古屋ドーム北側)
1階出口を南へ徒歩5分
入場料 一般 500円
小学生以下 無料 (中学生以上 500円)
2017 あいち・平和のための戦争展実行委員会
名古屋千種区末盛1-22-26 民主会館内 電話 052-931-0070 FAX 052-933-3249

2017 あいち・平和のための戦争展

戦争展ピースステージプログラム

8/10 (木)	11 (金)	12 (土)	13 (日)
●11:00～ 中区栄の空襲体験 乾 正男 さん	●11:00～ ヒロシマ・ナガサキの被爆体験 愛友会	●11:00～ 辺野古の現状 目黒 茂和 さん (三浦大学名誉教授)	●11:00～ 撫順炭鉱と 平頂山事件 奥瀬聖徳博物館研究員 日中友好協会愛知県連合会
●12:15～ そう列車がやってきた 小出 隆司 さん	●12:15～ 体験者が語る「戦争の狂気」 平和協議会	●12:30～ 映像で見る沖縄 命どう宝	●13:00～ 外征軍化する自衛隊 飯島 浩明 さん (名古屋学院大学教授) 不戦へのネットワーク
●13:00～ 安倍政権による改憲の新たな動き 本 秀紀 さん (名古屋大学大学院法学研究科教授)	●13:30～ 共謀罪で国民生活はどうなる！ 岩月 浩二 さん (弁護士)	●13:45～ 憲法9条と安保法との矛盾 ～南スーダン撤退の力 日報問題から～ 布施 祐二 さん (平和新聞編集長)	●14:15～ 私にとって「日本軍慰安婦」とは 愛知・日本軍「慰安婦」問題の解決をめぐる会
●15:15～ トランプ政権と日米安保 ～アメリカにおける軍事に対するコントロールの可能性 三宅 将一郎 さん (三聖短期大学教授)	●15:30～ ふたたび 戦争は教室から始まる。のかー「教育勅語」と福沢諭吉ー 安川 秀之助 さん	●15:00～ 名古屋北区の空襲体験 大島 良満 さん	
●16:30～ 宗教と戦争 大東 仁 さん (日宗大谷派・龍光寺住職)		●16:15～ 座談会「安倍政権と平和」 アジア太平洋平和文化フォーラム	

日本と朝鮮 / 愛知版

2017年7月(408)号

■発行／日朝協会 (発行責任者＝石橋正夫) ■昭和28年11月30日 第三種郵便物認可
■編集／日朝協会愛知県連合会事務局 ■464-0853 名古屋千種区小松町6-9-1
■Tel・Fax / 052-731-9445 ■Eメール / y-koide@mse.biglobe.ne.jp
■サイト / http://www.aichi-niccho.com/